

## 「第9回葛飾図書館友の会ウィーク」 in 中央図書館(11月4日~23日) 今年もおはなし会、絵本の読み聞かせ、紙芝居やマジックショー、朗読 ＝そして映画会、コンサート、特別講演会など週末を中心に展開＝

今年で第9回目を迎えた「葛飾図書館友の会ウィーク」が11月4日(土)から23日(木・祝)までの約3週間にわたって開催されました。一般参加団体は昨年より多い9団体、友の会の委員会のイベントを含めると24イベントを数えました。手袋人形講習会やおはなし会、ナイトシアター(2回)、CDコンサート、キーワード読書会を友の会主催で、そして特別講演会を中央図書館との共催で行いました。また参加団体は8月以降、ポスターやチラシでの準備などを重ね、スケジュール通りにイベントを開催しました。紙面の都合上、参加団体の活動状況を逐一掲載できませんことをお詫びします。

以下、参加団体です。かつしかシニア絵本の会、おはなしたまごの会、10(テン)の会、ザ・マジック、あおぞら、紙芝居サークル飛行船、ふたばの会、花だいこん、リコーダー友の会の皆さんでした。ご参加ありがとうございました。なお、ウィークの参加者数は主催者側230名、来場者は576名でした。

## 友の会ウィーク 友の会ウィーク特別講演会 11月19日(日) 早稲田大学准教授 市川真人氏が語る 「いまここ(だ)から(こそ)の読書」

なぜ私たちは本を読むのだろうか、という根源的な問題を提起した講演会であった。今回の特別講演会に共催くださった中央図書館の鈴木館長による挨拶に続き、大きくは次の3つの話題にそって講演が行われた。

話題① 歴史的な文脈のなかで今日を理解する

今は16世紀から20世紀まで続いた近代が終わり、ポスト近代に移行する時代である。効率主義から「非効率の豊かさ」へと、価値観が変わりつつある端境期といえる。

話題② 本と図書館の歴史

本の起源にはじまり、グーテンベルクの活版印刷で情報の画一化と大衆化が始まった。今日ではアクセス性、利便性に優れた図書館が可能になってきた。

話題③ 人工知能(AI)がもたらすもの

情報検索がますます便利になる時代にあって、書籍と図書館の価値が問われている。現在を生きる世代は、本の素晴らしさとITの便利さの両方を知ることができる最後の世代といえる。

実はスマホやタブレットを用いた検索は、近代が追求した効率主義と結果主義を情報技術によって具現化したものである。その意味でITの導入は、遊び心と非効率を重視するポスト近代(モダン)の方向とは相反するものである。そういう方向性の異なる価値観が混在しているのが現代の特徴ではないかと、講演を拝聴して思った。では、本の価値は何か?これからの図書館はどうあるべきかということは、利用者がそれぞれ考えるべきことなのだろう。手早く正解を求めようとする姿勢こそが、20世紀的な姿勢といえよう。

市川氏は文芸批評家として活動されるだけでなく、話し上手な先生である。早稲田大学のゼミ生はよい先生に恵まれて幸せだと思った。ご多忙な中ご登壇くださった先生に感謝したい。(友の会会長 朝野熙彦)

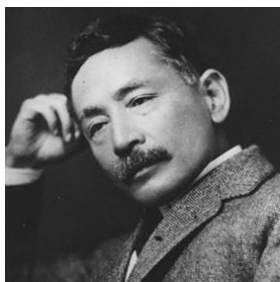


## 新春恒例 お正月は図書館で百人一首! 新春かるた大会

2018年1月3日(水) 午後2時~ 中央図書館 会議室1

第1部 かつしか郷土かるた 第2部 小倉百人一首大会(坊主めぐりや源平合戦)  
参加者には参加賞、上位入賞者には豪華賞品あり

## 生誕150年記念・DVD 映画(第5回映像文学館) 世界で読み継がれる作家「夏目漱石」を上映



11月23日(木・祝)、中央図書館会議室1において友の会ウィークの掉尾を飾る第5回「映像文学館」の映画が上映されました。この映画は昨年友の会ウィークで上映した「泉鏡花」とともに紀伊国屋書店ビデオ評伝シリーズ『文学と時代』の第4作です。監督は都憲雄、朗読を橋爪功が行い、文学シリーズの中でも紀伊国屋制作部が満を持して製作した名画です。

作品は第1部が「懊悩する魂」というタイトルで文明開化、日清・日露戦争など日本の近代化と同時代を歩んだ夏目金之助。出生の不幸、幼年期のトラウマを乗り越え、いかに作家・夏目漱石は誕生したか。その軌跡を松山、熊本、ロンドンでの入念な取材と最新の資料、研究者のインタビューを交え、たどっていきます。

約5分の休憩ののち、第2部「人間を押す文学」が上映されました。強度の神経衰弱と闘いながらも着実に「文学」へと向かう漱石。1905(明治38)年の『吾輩は猫である』からわずか10年余りの間に、未完成の大作『明暗』に至るまでの数々の名作を世に送り出す。ロンドン留学を経て処女作発表から国民的作家となるまでの豊富な資料を用い、その思想、文学、芸術を紐解いていくというストーリー。当日の参加者のアンケートでは8割以上の方が「素晴らしい映画で漱石文学を改めて読みたい」「明治の時代と漱石を囲む人々がよく理解できた」など、たくさんの感想が寄せられました。

## ことしは10匹のかえる 手袋人形講習会 難産(?)の末、200匹あまりが無事誕生 ♪かえるのうたがきこえてくるよ♪にあわせ実技も



うさぎ、こぶた、くまのミトンに続き、かえる。“みんなで楽しむ手袋人形講習会「今年は、10匹かえる！」”が11月16日(木)午前10時から会議室1で開催されました。この講習会は事前申し込み制で、人気があり、アツという間に定員に達する友の会児童サービス応援委員会の主催、中央図書館が共催するウィーク恒例のイベント。今年も20名あまりが参加し、児童室担当の図書館職員4名からかえるの手袋人形を使ったデモンストレーションを見たあと、製作指導を受けました。

市販のキットを使い、まず緑のフェルトにボンドで白黒の20個の目玉をつけたあと、緑の手袋の指先に割り箸で綿を詰め、白い糸で首を作ります。そして“カワイクなーれ”と、願いを込めた言葉をつぶやきながら両手の指先に掌の向きを考え、切り離れたフェルトを接着剤でつけて目が完成。その次は口と鼻作り。現場はハサミをテーブルに置く音しか聞こえません。赤い糸で10口と20鼻を刺しゅうします。これまでの手袋人形の製作とは違って細かい顔作りに時間がかかり、最後はおしゃれに首のリボンをつけてやっと完成。おたまじゃくしからではありませんが、助産師役の職員による親身な指導を得ながら、難産(?)の末、200匹あまりのかえるが正午過ぎに大量発生しました。

その後、終了予定時間を過ぎていましたが、ほとんどの参加者は途中でかえることもなく、実技指導を受けました。あの♪かえるのうたがきこえてくるよ♪を歌いながら、まず職員さんが演技。次に委員会の委員7名が前へ出てケケケやクッククック、ゲロゲロゲロと、賑やかに可愛く指を広げたり、両手を左右に揺らしたりこぶしを作ったりひらいたりの熱演でした。最後に、おはなし会でかえるの手袋人形につなげて読むとよいとされる絵本の紹介もありました。かえるは季節物で披露するのに相応しい季節があるとのこと。予定時間を大幅にオーバーしましたが、皆さん、楽しんでうにおかえりでした。





11月18日(土)、第65回のテーマは映画に使われたクラシック音楽特集でした。第1部アメリカ篇では「アマデウス」「愛と哀しみの果て」のモーツァルトや「ダイ・ハード2」のシベリウス、「羊たちの沈黙」のバッハ等など、恋愛物・アクション物を取り混ぜ7曲、第2部のヨーロッパ篇では「眺めのいい部屋」のプッチーニ、「そして船は行く」のドビュッシー他、文学的でしっとりとしたラインナップで6曲。屋前の雨模様が足元に影響したのか参加人数は今一つでしたが、映画にも音楽にも造詣の深い方が来られたようで、「映画館で見たので場面が目につく」「とても好きな曲」「続編を企画して」等、アンケートでは好評でした。「映像もあれば」のご要望も通例のようにあり、著作権に触れぬ範囲での画像や資料などの投影の工夫も今後の課題になりそうです。

## 展示コーナーを利用して参加団体や各委員会がイベントの紹介やこれまでの成果などを披露

館内2箇所にある展示コーナーを利用して友の会の紹介や参加団体の会の紹介、イベントのポスターなどを掲示しました。参加団体は加入の呼びかけを含めた掲示をしたり、友の会の各委員会は最近のイベント開催経過やこれまでの活動内容を展示しました。

児童サービス応援委員会は「おはなしくらぶ」が使用した絵本を並べ、ガラスケースにはこれまで作成した手袋人形を、広報委員会は昨年12月から発行した季刊紙「友の会通信」のカラー原

版を、またCD・DVDコンサート委員会はコンサートプログラムのカラー原版を展示しました。さらにポスターとともにコンサート来場者からいただいた感想を含めたアンケート結果を掲示しました。またナイトシアター委員会は昨年毎月開催した映画のポスターをホワイトボードに上映順に、さらに広報委員会は隔月に開催している「キーワード読書会」で参加者が選んだ本のリストを掲示しました。期間中、多くの来場者が足を止めて見ている姿が見かけられました。



## 「葛飾図書館友の会」で一緒に活動しませんか

『友の会』は多くの会員によって活動しています。図書館を利用されている方、活動趣旨に賛同される方々、是非ご入会いただいて、あなたの図書館に関わるいろいろなアイデアを少しずつ実現してみませんか？

原則として第3土曜日の午後1時から3時まで中央図書館内で、また友の会の開催イベント時でも直接の入会受付を行っていますので、是非ご利用ください。年会費は一般会員1,000円、賛助会員は1口2,000円です。上記の方法が利用できない場合、入会希望者は中央図書館に入会届をご提出の上、年会費を下記の口座に納入してください。図書館での年会費の直接納入はできません。「通信欄」に一般あるいは賛助会員

かを明記の上、29年度年会費とご記入下さい。また

ゆうちょ銀行	口座番号	00100-7-392065
	口座名称	葛飾図書館友の会

1口500円の寄付も大歓迎です。払込手数料は窓口では130円、ATMからでは80円です。恐れ入りますが、ご負担をお願いいたします。入会届は友の会HP (<https://katsutomo.jimdo.com/>) からダウンロードできます。

●問い合わせ先 中央図書館友の会担当者(打越さん、吉村さん、白井さん、川井さん) Tel. 03-3607-9201

## 新宿図書センター「さよならリサイクル市」開催に協力 数か月にわたる除籍本の処理から会場準備

6月に中央図書館から当会に、昭和42（1967）年にオープン以来、区民に愛されてきた新宿図書センターの休館に伴うリサイクル市開催への協力依頼がありました。11月半ばまでの4ヶ月間、同センター保存庫で、既に保存年限が過ぎ除籍された図書や資料などのICタグ剥がし、奥付付近に「除籍処理済み」の赤スタンプ押し、さらにバーコード上にリサイクル処理済みのシール貼りという作業を会員約20名（延べ170人位）が行いました。11月21日は会場となる2階ホールで、処理が済んだ一般書・旅行ガイド、児童書などのリサイクル本を並べる作業があり、計7名の会員が協力しました。



### 3日間の会場案内や本の補充、駐輪場の整理などで活躍

そしていよいよ「さよならリサイクル市」が12月2日（土）から4日（月）までの3日間、午前10時から午後3時まで2階のホールで開催されました。用意された本は4万冊あまり、協力する会員は防寒対策をしてオレンジ色のエプロンを着けての駐輪場の整理、1階入口や2階ホール出口での誘導・整理、そしてホール内での整理や資料の補充などを中央図書館職員の指示のもと、活動しました。

第1日目は寒い朝早くから1階の入口前は長蛇の列が出来、10時の開始までにはセンター前の広場の半分くらいまで人が溢れました。また自転車で来場する方も多く、正面玄関前の駐輪場はあっという間に埋め尽くされ、左右の建物脇や駐車場まで誘導するほどの人気でした。スタート直後のホールはお子さん連れも含め、来場者が溢れかえり、入場制限をするほど。本の補充も頻繁に行われ、午後3時の入場締め切り以後もお目当ての本を探す方がホール内を回っていました。来場者は1900名あまり。

第2日目の出足は初日ほどではありませんでしたが、午後3時近くに駆けつける方たちが多く、絵本を嬉しそうに手にした子どもたちをはじめ、皆さんは持参されたビニール袋や手提げ袋、リュックをいっぱいにして満足そうにお帰りになったようです。



最終日の3日目は来場者は少なかったものの自転車で来られる方もおり、開場前には列が出来ました。しかしホール内は余裕があり、逆にゆったりと本を選ぶ方も多かったようでした。このリサイクル市には約3800人の本好きな区民が来館され、天気にも恵まれての盛況な、そして文字通りの「さよなら市」に友の会会員も延べ20名あまりが参加・協力し無事終了しました。

なお、新宿図書センターは平成32（2020）年以降、葛飾赤十字産院に併設される区立図書館として生まれ変わる予定だそうです。

## 色えんぴつ

平成二十九年も数日後には平成三十年を迎えます。平成元年に生まれた赤ちゃんがテレビを賑わしてからも三十年。少し大人の仲間入りが出来たのではないかと思われる年齢になったのではないのでしょうか▼人生、そこその年齢になると、一年一年が短く、そして早く過ぎて行くような気がします。「歳を重ねるとは、人として大きくなること」と、何かの本で読んだ記憶があります▼高齢者と言われるようになり、人として大きくはなれていないとは思えませんが、若さだけではできなかつたことを少しずつ形にしてみようと思うようになりました。若さだけでは、知識と人生経験を積み重ねなければわからないこと。いまだから知識と経験を生かし、何か役に立つことを見つけて行動のできる立場になったのではないかと思います▼この数年「認知症」という活字を多く目にするようになりました。「認知症」は脳の病気だけではなく、心の病から、とも言われています。その心の病を少しでも和らげられるお手伝いできればと思うようになり、いままでの趣味を生かし、仲間作りができればと考えるようになりました▼シニアのためのある社会参加セミナーに『生きがい、やりがい、学びがいを求めて』というキャッチフレーズがあります。目的を持って身近な方たちと学べたらと思います。明日の自分のためにも…。

（小林広報委員）